

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成18年度病害虫発生予報第10号について

平成18年度病害虫発生予報第10号を発表したので送付します。

## 平成18年度病害虫発生予報第10号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

### ○ 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	タバココナジラミ類 (タバココナジラミバイオタイプQ 及びシルバーリーフコナジラミ)	やや多	2
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	並	2
	灰色かび病	並	3
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	並	3
	うどんこ病	多	4
	灰色かび病	やや多	4
	ミナミキイロアザミウマ	多	4
	ヒラズハナアザミウマ	並	4
	黒枯病(仮称)	前年より多い	4
冬春トマト	葉かび病	やや多	4
	灰色かび病	やや多	5
	菌核病	多	5
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	—	5
	タバココナジラミ類	やや多	5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	5
	アブラムシ類	やや多	6
	ハダニ類	多	6

### ○ 作物の生育状況(1月中旬)

冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

### ○ 2月の気象予報

平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年より高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

(1か月予報 鹿児島地方気象台1/19発表)

## ○ 発生予報の根拠および防除対策

### 施設野菜全般

#### 1 タバココナジラミ類（タバココナジラミバイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ）（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の巡回調査では、冬春キュウリでの発生面積率36.8%（平成21.3%）は平成よりやや多、百葉当たり虫数2.5頭（平成15.9頭）は平成並みである。
- 2) 冬春トマトでの発生面積率33.3%（平成20.8%）、百葉当たり虫数4.2頭（平成1.5頭）はいずれも平成よりやや多である。
- 3) 冬春ピーマンでの発生面積率7.7%（前年7.7%）、百葉当たり虫数0.1頭（前年0.2頭）で、いずれも前年と同程度である。

[防除上の注意]

- 1) タバココナジラミ バイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での判別は不可能である。
- 2) どちらも多発するとスズ病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。また、トマトでは黄化葉巻病（TYLCV）を媒介するので特に注意を要する。
- 3) 最近、一部の地域でタバココナジラミ類に起因すると推測される黄化葉症（メロン、キュウリ）が発生した事例もあるので、ウリ科作物での発生にも注意が必要である。
- 4) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 5) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いボタニガード乳剤等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。
- 6) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段も利用する。

### 冬春キュウリ

#### 1 ベと病（並）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率63.1%（平成72.5%）は平成よりやや少、発病葉率8.5%（平成17.9%）は平成より少である。
- 2) 向こう1か月の気象は平成に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平成より高い、降水量は平成並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

#### 2 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率31.6%（平成41.7%）は平成並、発病葉率1.1%（平成4.7%）は平成より少である。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

### 3. 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率10.5%(平成15.2%)、発病果率0.4%(平成0.7%)はいずれも平成並である。
- 2) 向こう1か月の気象は平成に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平成より高い、降水量は平成並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

### 4 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率63.1%(平成33.9%)は平成より多、発病葉率4.9%(平成4.4%)は平成並である。
- 2) 向こう1か月の気象は平成に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平成より高い、降水量は平成並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 摘除した発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

### 5 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率5.3%(平成8.0%)、葉当たり虫数0.1頭(平成0.2頭)はいずれも平成並である。
- 2) 向こう1か月の気象は気温は平成より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

冬春ピーマン

### 1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率38.5%(平成31.8%)、発病葉率0.8%(平成2.8%)はいずれも平成並である。
- 2) 向こう1か月の気象は平成に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平成より高い、降水量は平成並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、予防散布を行う。

## 2 うどんこ病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率92.3%(平年48.0%)は平年より多、発病葉率8.4%(平年4.6%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

## 3 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率7.7%(平年1.7%)、発病果率0.1%(平年0.0%)は平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年より高い、降水量は平年並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

## 4 ミナミキイロアザミウマ (多)

※平成18年度病害虫発生予察防除情報第6号(1月24日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率53.9%(平年30.0%)は平年よりやや多、10花当り寄生虫数5.4頭(平年0.8頭)は平年より多である。
- 2) 向こう1ヶ月の天候は平年に比べて気温が高いと予想されており、本虫の増殖に好適な環境がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

## 5 ヒラズハナアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率30.8%(平年26.2%)、10花当り寄生虫数4.5頭(平年4.9頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除を徹底する。

## 6 黒枯病(仮称) (前年より多い)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率7.7%(前年0.0%、前々年30.0%)、発病葉率0.1%(前年0.0%、前々年0.5%)は前年より多い。

[防除上の注意]

- 1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 2) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

## 1 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率33.3%（平年8.1%）は平年より多、発病葉率2.6%（平年0.7%）は平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、降水量は平年並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

## 2 灰色かび病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率8.3%（平年1.0%）発病株率0.3%（平年0.0%）はいずれも平年よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、降水量は平年並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

## 3 菌核病（多）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率25.0%（平年1.0%）、発病株率0.6%（平年0.1%）はいずれも平年より多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、降水量は平年並または多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

## 4 トマト黄化葉巻病（TYLCV）（－）

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類（媒介虫）の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在し、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

## 5 タバココナジラミ類（シハ・リー・コナジラミ、ハ・コナジラミ、ハ・イタワ・Q）（やや多）

施設野菜全般の項参照

### 冬春イチゴ

## 1 うどんこ病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の葉での発生面積率66.6%（平年26.3%）は平年より多、発病葉率3.4%（平年1.6%）は平年よりやや多ある。
- 2) 果実での発生は未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

## 2 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率41.6% (平年16.2%) は平年より多、寄生株率5.5% (平年2.2%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多発すると新葉の展開が不十分になって奇形葉となったり、スス病を併発して、樹勢や果実品質を著しく損ねるので注意が必要である。
- 2) この時期の防除はミツバチへの影響が懸念されるので、十分に留意する。

## 3 ハダニ類 (多)

※平成18年度病害虫発生予察防除情報第7号(1月24日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率91.6% (平年40.0%)、寄生株率32.3% (平年8.7%) はいずれも平年より多である。
- 2) 向こう1ヶ月の天候は平年に比べて気温が高いと予想されており、本虫の増殖に好適な環境がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一種類・系統の薬剤の連用を避ける。

### ○ 農薬散布時のドリフト対策について

- 1 ポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬の使用については今まで以上に厳重な注意を払うことが必要です。
- 2 風の弱いときに、ノズルや散布方向、噴霧圧力などに注意して、適正な農薬散布を心がけましょう。
- 3 地域でよく話し合い、農薬の使用時期や農産物の栽培内容などを十分調整しましょう。
- 4 農薬の散布について疑問点がありましたら、病害虫防除・肥料検査センターもしくは最寄りの農業改良普及センターへお問い合わせください。

### ○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。  
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>  
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。
- 3 発生量(程度)の区分  
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅  
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅  
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅

やや少ない (やや低い) 平年並の外側 20% の度数の入る幅  
少ない (低い) やや少ないの外側 10% の度数の入る幅  
(平年値は過去 10 年間の平均)

#### 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。

- 1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

#### ○ お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

#### 【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp